

CONTENTS

- P1 巻頭言 生成系AIなどのツール利用について
高大接続・全学教育推進センター 副センター長／教育開発・学修支援部門
部門長 松本 真哉
- P2 学生のメンタルヘルスケアと教職員のFD・SD研修を兼ねた馬介在活動の取り組み
高大接続・全学教育推進センター 安野 舞子
- P6 学修成果の可視化 ⑦ グローバル人材育成の課題：BEVI受検結果から
大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター 市村 光之
- P9 CENTER NEWS



生成系AIなどのツール利用について

高大接続・全学教育推進センター 副センター長／教育開発・学修支援部門 部門長 松本 真哉

ChatGPTに代表される生成系AIの利用が、大学を含む教育機関や企業などで話題になっています。また、ビジネス雑誌などでも多くの特集が組まれています。企業においては、どちらかといえば利用を前提とした前向きな論調が多いようです。一方、教育機関では、その状況は異なります。本学の場合は、令和5年6月15日付で、ChatGPTなどの生成系AIの利用に関する見解が示されています。そこでは、このような新しい技術の可能性や有用性に触れると同時に、利用において注意すべき点が示されています。このリリースで示された注意事項は、個人情報や秘匿情報を入力しない、結果を自らの著作などとししない、出力された情報を鵜呑みにしない、の3点です。私はまだ生成系AIの利用経験はありませんが、以前から、類似のサービスである英文翻訳サービスの利用を注視すると同時に、自らも利用しています。本稿では、やや生成系AIとは異なりますが、英文翻訳サービスの利用について私の感触を述べたいと思います。

英文翻訳と英文化は、当然ながら対象となる記述内容の理解を伴う行為であり、そのために関連する英語学習が必要です。あくまで個人的な経験に基づく見解ですが、翻訳サービスを利用した英文翻訳と英文化は、どちらの場合も、出力された内容について校正が必要な場合がほ

とんどだと感じます。しかし、このようなサービスを単なるツールとして利用し、出力結果を確認しない、あるいはその確認が不十分のままであれば、奇妙な内容を含む文章を外部に示すことになります。英文翻訳の対象となる内容や、英文化する内容などに対する理解が不足する場合であるほど、出力結果への配慮は薄く、単なる作業としてこれらの行為が進められているように感じています。この点は、本学が示す注意事項で示された、出力された情報を鵜呑みにしない、という内容に通じると考えます。

今回取り上げた翻訳サービスや生成系AIの利用は、これらのツールとしての役割と相補的な関係にある、文章読解能力や外国語の能力、作文能力に関する学習が伴う必要があります。既に、「AI vs. 教科書が読めない子どもたち(新井紀子著、東洋経済新報社)」などでも指摘されているように、大学生なども含めた若い世代の文章読解能力の低下が議論されています。このような現状も踏まえると、生成系AIなどの適正な利用に関する指導が最低限必要かも知れないと感じています。これから本学でも、生成系AIに関するアンケートを実施する予定です。皆さまのご意見やご経験、ご見解などを積極的にお寄せ頂ければ幸いです。

学生のメンタルヘルスケアと教職員の FD・SD研修を兼ねた馬介在活動の取組み

高大接続・全学教育推進センター 安野 舞子

はじめに

2023年7月6日、「馬との関わりを通して自らを知る－よりよい教育・研究・学生支援活動を目指して」とのテーマでFD・SDセミナーを開催しました。「なぜFD・SDに馬なのか？」と怪訝に思われる方もいらっしゃるかも知れませんが、馬のもつ力、そしてその可能性には計り知れないものがあり、特にメンタルヘルスの分野においては、「馬介在心理療法 (Equine Assisted Psychotherapy)」(いわゆるホースセラピー) が、一定の効果がある取組みとして認められています。そして、近年では、精神的・肉体的な改善を目的としたホースセラピーのみならず、馬とのかかわりを通して自己への気づきや成長を促す学びとしての「馬介在学習 (Equine Assisted Learning)」の取組みが注目されており、この、馬とのかかわりを通じた自己内省・自己理解・自己変容という側面を、新たなFD・SD活動の要素として取り入れていくことは有益なのではないか、と筆者は考えています。

高大接続・全学教育推進センター（以下、高大センター。）が企画・運営を行うYNUリテラシー教育のシビック・リテラシーでは、保健管理センターと連携して「こころの健康管理」と「ダイバーシティ」について各学部を周り、初年次生を対象に講義を行っています。特にメンタルヘルスに関しては、毎年100名前後の学生が新規に保健管理センターを訪れ、年間延べ1,500回を超える相談が臨床心理士により行われている、という現状があります。心身の不調により学業の継続が困難な学生を前に、その対応に戸惑う教職員も少なくありません。また、教職員自身が、心身の不調を抱えながら業務を遂行している、という現状もあるでしょう。そこで、そうした困難を抱える学生が心の安定を取り戻し、教職員も心身ともに健康で、心置きなく教育・学生支援活動に専念できるよう、学修者および教職員を支援する新たなプログラムを、高大センターと保健管理センターで実施することにいたしました。そのプログラムとは、馬を利用した「馬介在活動」であり、この取組について教職員の皆さまに説明させていただくために、上述のFD・SDセミナーを開催したのでした。

なぜ「馬」なのか？

歴史上、人と馬は様々な形で関わりを持ち続けてきました（農業や輸送・移動の手段、軍事用の乗り物等とし

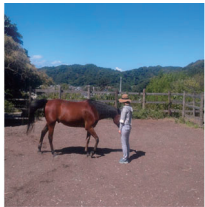
て）。近年では、人間の娯楽のための競馬だけでなく、人の心身の癒し、不調の改善、健康の促進、自己の成長を目的とした、いわゆるホースセラピーでも馬は活躍していますが、馬がそのような活動に適しているのは、馬にはそれを可能とするいくつかの特性があるからです。その特性とは、まずはなんと言っても「大きくて力強い存在」である、ということが挙げられます。その、自分よりも大きくて力強い存在と向き合うことで、恐怖心が克服できたり、自信を得ることができ、その経験が、自らの人生において勇気をもって挑戦する場面に直面した時に役に立つと考えられています。また、馬は被捕食動物であることから、繊細な感性（特に嗅覚や聴覚、そして視覚）をもち、人のちょっとした動きや、本人でさえ気がつかない無意識の動きも素早く察知する、という能力があります。その馬の察知による反応を見ることで、目の前の人がどのような感情や思考をしていたのか、予想することができると言われています。また、馬は“脳の鏡”とも言われているミラーニューロンが多く、共感性の高い動物として知られています。よって、関わる人が緊張状態であると馬も緊張状態になるなど、まさに鏡に映し出すかのように馬は振る舞います。さらに、馬は社会的な動物であり、群れでの役割を決め、仲間と共にいることを好む、ということから、「社会的な生き物」という点では人と非常に似ている、と言えます。このように、社会を構成し、仲間と共に行動するという点からも、馬と共に活動することで比喩的な学びの機会が得られる、と考えられています。人間同士の間柄では、「本音と建前」でやり取りをしたり、嘘をついたり、忖度することも出来ませんが、馬は人に対して嘘をついたり、忖度することはありません。自らが感じたままを表現します。よって、馬の振る舞いから見える我々人間の思考や感情、そして行動は、嘘をついたり隠したりしようがないほど、ほぼありのままが（馬に）映し出されていると言えます。このような数々の特性を活かして馬を介在させた活動が行われており、先述の「馬とのかかわりを通じた自己内省・自己理解・自己変容」を可能にしてくれる取組みとして、近年、注目されているのです。

「馬とのかかわりを通して自らを知る」プログラム

この、馬の特性を活かした本学での馬介在活動を「馬

とのかかわりを通して自らを知る」プログラムと称し、本年（2023年）9月から施行的に開始いたしました。学生については、主に保健管理センターでカウンセリングを受けており、担当する臨床心理士が心身のコンディション等から受講に問題なしと判断した者に対して参加の声をかけを行い、教職員については、まずは上述のFD・SDセミナーにご参加いただき、参加への関心をお持ちいただいた方にお声がけしています。

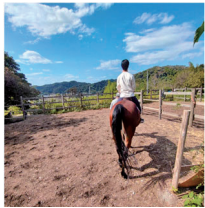
本プログラムの実施方法ですが、今年度は、神奈川県三浦郡葉山町にある「葉山ハーモニーガーデン」が実施している「ホースハーモニー」というプログラムを学生・教職員が受講する、という形で行っています。「ホースハーモニー」とは、ひと言でいうと、「馬とのコミュニケーションを通じて、心の安らぎと活力回復を実感するためのプログラム」です。1回あたりのプログラムは約3時間の座学と実習（絆作り、曳き馬、乗馬、ブラッシング等）で構成されており、昼食時はお弁



馬との絆作り



曳き馬



乗馬



草やり

当が支給され、活動終了後はお茶とお菓子をいただきながら、その日の振り返りを行っています。この、葉山の牧場でのホースハーモニーは、基本的には3回受講していただくことにしています。

馬介在活動の心理的効果

本プログラムは、JRA（日本中央競馬会）および公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会の「多様な馬の利活用等の取り組みを支援し、発展させるための事業」の助成を得ており、実証研究を行うことにもなっていることから、「人を対象とする生命科学・医学系研究倫理専門委員会」の承認（人医-2023-07）を得て調査活動も行っています。

参加者の皆さまには、事前のオンラインによるアンケート、ホースハーモニー受講直前・直後の心理検査、一連のホースハーモニー受講後のオンラインアンケートにご協力いただくことになっていますが、これまでに（本原稿を執筆している2023年10月現在）、5名の学生と9名の教職員にご参加いただいております、そのうち、第1回目の受講時に心理検査「POMS2（Profile of Mood States 2nd Edition）」短縮版に回答した学生4名・教職員8名のデータを分析したところ、大変興味深い結果がみられました。

POMS2は気分・感情の状態を素早く評価できる検査であり、【怒り-敵意（AH）】、【混乱-当惑（CB）】、【抑うつ-落ち込み（DD）】、【疲労-無気力（FI）】、【緊張-不安

（TA）】、【活気-活力（VA）】、【友好（F）】の7尺度と、ネガティブな気分状態を総合的に表す【TMD得点】が測定できます。POMS2の7尺度の素得点およびTMD得点は、年齢、性別ごとの平均値、標準偏差から「T得点」が算出されており、T得点が低いほど、怒り-敵意、混乱-当惑、抑うつ-落ち込み、疲労-無気力、緊張-不安の状態が低いことを示します。一方、活気-活力、友好についてはT得点が高いほど良い状態を示します。

教職員8名の対象者について、ホースハーモニー受講前後の7尺度およびTMD得点のT得点の平均値の差を検討した結果、【疲労-無気力（FI）】（ $t(14)=2.09, p<.05$ ）、【緊張-不安（TA）】（ $t(12)=1.75, p<.05$ ）、【活気-活力（VA）】（ $t(14)=-1.71, p<.05$ ）、【友好（F）】（ $t(14)=-1.94, p<.05$ ）、【TMD得点】（ $t(14)=1.83, p<.05$ ）において有意差がみられました（図1）。



図1 POMS2の変化【教職員】(n=8)

一方、学生4名については、サンプル数が少ない為、統計的手法を用いた検定は行っていないが、すべての尺度・TMD得点の平均値において受講後にネガティブな気分が低下し、ポジティブな気分は増加する傾向が見られました。特に【抑うつ-落ち込み（DD）】において、受講後の低下が顕著である可能性が示され、この点は、健常な教職員とは異なる特徴的な傾向と推測されます（図2）。



図2 POMS2の変化【学生】(n=4)

動物とのふれあいが、人の心理面に効果があることはこれまで報告されていますが、特に「馬」を介在させた取り組みについて、日本では脳性まひなどの肢体不自由や自閉症や多動性障害などの子どもへの馬介在療法が多く行われており、その効果についても報告はされています。しかし、「健常な成人」を対象とした馬介在プログラムは少なく、その効果についての検証もほとんど行われていません。よって、上記の結果から、馬とのコミュニケーション活動を通じて、健常な成人（＝本学教職員）において、活動前に抱いていた疲労感や緊張が薄れ、活気・活力や友好といったポジティブな気分の増加が認められることが分かりました。これは、たった1回のホースハーモニーの

受講による結果に過ぎませんが、今後もこの活動を続け、こうした心理面の状態が継続できれば、本学教職員の働く意欲や職場環境の向上が期待できるかも知れません。

一方、学生については、“メンタル面に問題を抱える成人”と言えるかと思いますが、彼・彼女らは教職員と比較すると、元々強い抑うつ・落ち込み気分を有している可能性が窺えます。しかし、ホースハーモニー受講後の変化からは、メンタルに問題を抱え、強いネガティブ気分を有する学生においても、抑うつ・落ち込みの程度が、健常な成人と同程度にまで低下する傾向も推測されました。これもまた、たった1回のホースハーモニーの受講による結果に過ぎませんが、今後もこの活動を続け、こうした心理面の状態が継続できれば、学業への復帰、生きづらさからの脱却が期待できるかも知れません。

馬介在活動の参加者からの声

ホースハーモニー受講時は、馬との交流の様子を写真や動画に収め、終了後、参加者にその写真・動画をメールにて送付していますが、その参加者とのやり取りの中で、大変貴重な感想をお寄せいただいています。以下、その一部をご紹介します：

「動物による癒しばかりを想像して参加したのですが、自分自身に対しての想像以上の気づきや様々学ぶことがあり、大変貴重な体験になりました。」(職員)

「回を重ねるごとに、自分の硬さがほぐれてきているような気がしています。特に初回はホースハーモニーがどんなものか想像がつかなかったのと、初めてだったことでガチガチになっていました。その硬さがほぐれてきたことで自分のニュートラルな状態に改めて気づけたことも参加した収穫だと思います。」(学生)

「ホースハーモニーがホースセラピーとは異なり、かなり馬を通じて人間の“生きる力”を引き出すものであることは予想していましたが、馬との関係づくりがどれも人間との関係づくりを根本からとらえ直すきっかけとなることを体験することができました。また、人間社会のジョーシキに囚われて馬にお客さん扱いされてしまうのは、自分が馬も自分もお客さんのように扱っていることに気づかされたように、アナログ的に馬による鏡で自分の社会的文化的ジョーシキを纏った姿を見ることが出来ました。」(職員)

これらの感想から、上述の「なぜ『馬』なのか？」で説明した馬の特性が、プログラム内容に見事に活かされていることがよくお分かりいただけるかと思います。

おわりに

今、日本の高等教育の世界では、教育DX、生成AIの教育活用など、「人工的なもの」への対応が益々迫られているかと思いますが、また、特にFDの世界ではこれまで、アクティブラーニング、ICTの活用、遠隔授業、AIの活用など、その時その時の“外側の変化”に対応していくよ

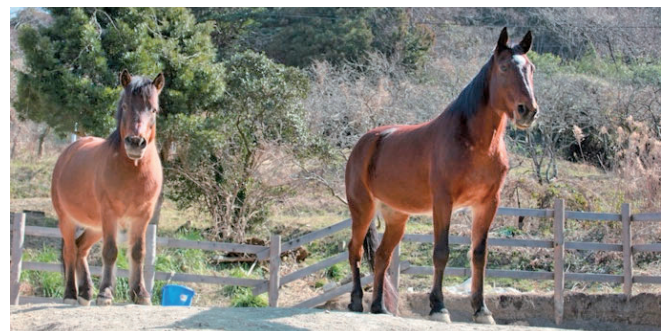
う求められてきたように思います。しかし、「人工的なもの」に囚われれば囚われるほど、本来、我々人間が持っている身体的な感覚や感性が鈍くなり、ひいては、生身の「いのち」に対する感謝や畏敬の念が薄らいでいってしまうのではないのでしょうか。また、自分の内側を観ずに外側にある情報ばかりに目が向いて、自分自身が感じたり察したりする感覚が忘れ去られたりしてはいないのでしょうか。特に「察する力」は学生との関係、同僚との関係など、教育や研究の場でも非常に重要であると考えます。従って、そのような時代だからこそ、まずは自らが真に豊かな人間になるためにも、五感を開くこと、感性を磨くことも忘れてはならず、「馬と自然」とのふれあいはその機会を与えてくれるものと思います。

一方で、最近の厚生労働省の調査では、仕事や職業生活で強い不安やストレスを感じている労働者の割合は5割を超えていると報告されています。個々のメンタルヘルスの善し悪しは、個人や組織の生産性、仕事満足度、勤務状況、離職率、ハラスメント問題に大きな影響を与える、と言われており、よりよい教育・研究、学生支援活動を行い、大学全体を活性化していくためにも、我々教職員が心身ともに健康な状態であることはとても大切です。そして、心身の癒しや健康の維持・促進と共に、多忙を極める日常において、静かに自分自身を見つめる機会も必要であると考えます。自分はなぜこの仕事をしているのか、自分はこの仕事を通して人生で何を成し遂げたいのか—このような生きる上での土台・根っこの部分を見つめ直すことも大切であり、馬との交流による自己内省、自己理解、自己変容がそれを可能にするのではないかと考えています。そしてもちろん、馬とのふれあいは、十分に癒されます。

「自身の教育・研究を深めるために、実りある学生支援を行うために、まずは今の自分を知る」ことを目的に、FD・SD研修の一環として引き続き、この馬介在活動を実施していきたいと思っています。

※本プログラムへのご参加は、随時受け付けております。ご自身の参加だけでなく、指導学生への受講の促しや、指導学生と一緒に受講も可能ですので、ご関心をお持ちいただけましたら、まずはお気軽にお問い合わせください。

お問い合わせ先：高大接続・全学教育推進センター
専任教員 安野 aec-fd@ynu.ac.jp



葉山ハーモニーガーデンのルーカス（右）とタロウ

学修成果の可視化 ⑦

グローバル人材育成の課題：BEVI受検結果から

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

人間の潜在的な欲求、信念、価値観などの傾向を測定する心理測定尺度：Beliefs, Events, and Values Inventory（以降、BEVI）の全学実施結果報告の第2弾です。本学では秋学期の学生プロフィールと連動して、学部生・大学院生にBEVIを任意受検させています。昨年秋の本ニュースレターVol.18では、性差による特徴を中心に報告しました。今回は、2022年10月実施のBEVIのデータから、グローバルに活躍できる人材に求められる《異文化間能力：異文化の相手を理解し受け入れる態度や知識、スキル》に当たる結果について紹介します。

異文化への関心は二極化している

BEVIの結果は、潜在的な欲求、信念、価値観などの保持度合いを17の尺度により表示します。全学のスコア分布では、多くの尺度は頂点が1つの山形、つまり正規分布に近い形になりますが、「尺度17：Global Resonance」のみユニークな分布を示します。なお尺度17は、「異なる個人、グループ、言語、文化について学ぶこと/出会うことに興味がある：グローバルな関わりを求めている」度合いであり、異文化間能力に相当します。

図1は尺度17の分布です。本学の学部生の分布を見ると、Decile 2を頂点に大きな山を形成し（Decile 1～3で54.7%）、以降下降していきませんが、Decile 7～9にも小規模の山が見られます。つまり、異文化受容のレディネスが低い、または無関心の人が多数を占める一方で、意識の高い人も少なからず存在するのです。この二極化とも言える傾向は性差に関わりません。なお、BEVIのスコアは、143カ国・1万件のデータから民族、文化、言語などの多様性に配慮した標準群を設定して1～100%の分

布を定め、受検者の位置を示します。Decile 2は、標準群の分布の下位から数え20%の位置であることを意味します。

図1には、全学部1年生にBEVIを実施している広島大学の結果（2023年4月実施）も入れています¹⁾。広島大学のほうがやや優勢ですが、分布は本学と同様です。広範に実施した2大学が類似の分布を示していることから、この二極化傾向は日本人の大学生に共通する傾向と言えそうです。BEVI日本語版を開発した広島大学名誉教授の西谷元氏によると、欧州諸国の学生は日本人と対照的で、Decile 1～3は少なくDecile 7～9が多くを占めるそうです。筆者担当科目のスウェーデン人学生に、初めて外国人と接触した時の印象を訊ねると、物心ついた時から周囲に異文化の人や肌の色が違う人がいたので「外国人」として意識したことがないとの答えでした。EUという一つの経済圏を形成し、多様な文化を持つ人々がボーダーレスに行き来する欧州社会と、島国で移民を受け入れたがらない日本社会の違いもあり、日本人のスコアが低いのは想像の範囲です。広島大も同傾向ですし、本学の学生たちは平均的日本人並みとも言えそうですが、だからそれでよいとは言いきれません。

異文化に対する行動は3タイプ？

筆者は全学教育科目において、海外研修等を伴わない座学の異文化理解入門科目「グローバル化と日本人」（全学部・学年対象）を秋学期に開講しています。図2より、同科目の2022年度履修生（27名）と本学の全学部生の尺度17の分布を比較すると、当該科目履修者のDecile1～2は全学よりも少なく、Decile 6～9は多く分布していま

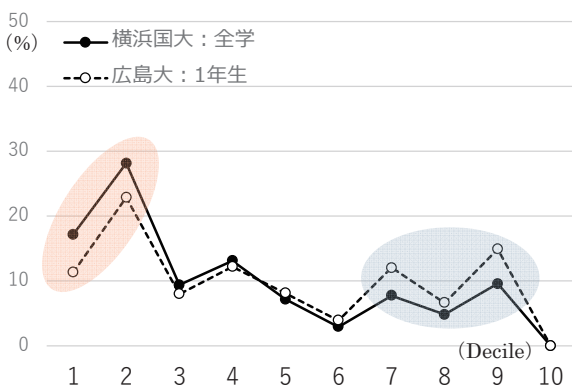


図1 尺度17 広範に実施した2大学の分布

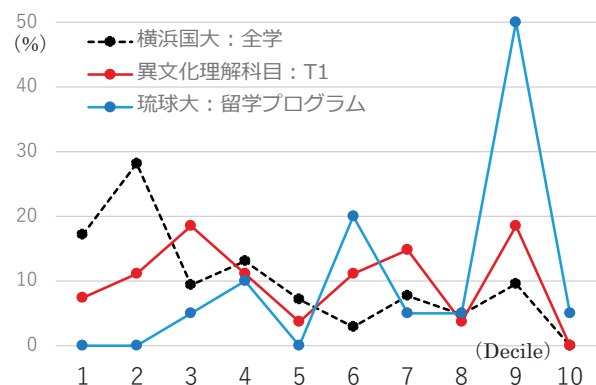


図2 尺度17 全学、異文化科目、留学プログラム比較

す。全学と比べ異文化理解に関心が高い学生が履修していることがわかります。

さらに、図2に加えた琉球大学の海外研修を含むプログラムの履修生20名の海外研修前のスコア分布をみると、Decile 1、2はゼロで、Decile 9が50%を占めます（東矢、當間、2019）²⁾。海外研修に参加する学生は、英語力がある人たちが多くですが、それに加え事前に異文化を受容する準備ができている人も多いということです。これらから類推すると、異文化への対応または異文化に関わる科目やプログラムに対する学生の行動は、以下の3タイプに分かれそうです。

- ① 異文化対応や、それに関わる学習に関心を示さない学生：尺度17のDecile1～3（全学の54.7%）に多い
- ② 異文化に関心があり、きっかけがあればそれに関わる学習に参加するが、留学等を希望するには至らない学生：各Decileに分散
- ③ 異文化に関する学習に留まらず、留学や海外研修プログラムに参加を希望する、さらに実際に参加する学生：Decile7以上（全学の22.1%）に多い

2023年度秋学期の筆者担当科目「グローバル化と日本人」の履修生に、履修希望理由を自由記述のアンケート形式で訊いてみました（回答者41名）。上記のタイプ①はいません。タイプ②に相当する人は86%で、異文化に関心があると回答した人（32%）と、留学等は考えていないが就職後に外国人と協働や共生で役立つと期待する人（54%）の2派に分かれました。留学したい、または留学の準備のため履修すると明記してきたタイプ③の人は14%でした。

グローバル人材育成の課題

外国人など異文化の人々との共生・協働が必要なのは、留学や将来海外赴任を希望する人々に限りません。経済の国際化のみならず少子化や生産年齢人口の減少に伴い、国内における外国人労働者との協働または相互理解の促進は、日本経済および社会の将来に関わる課題です。コンビニや飲食店の従業員が外国人であることは、もはや珍しくなくなりました。日本に住む外国人は総人口の2%を超え、日常生活で外国人と接する機会は増えています。国内に暮らしていても、在留外国人と共生・協働できるという意味でのグローバル人材の育成は喫緊の課題です。

コロナ渦が落ち着き、本学を含め、多くの大学で留学等の海外研修プログラムが再開されています。もちろんそれらは、グローバルに活躍できる人材の育成策として有効な取り組みです。ただ、その陰で、海外や外国人に関心を示さないタイプ①の学生たちが取り残されているのが現状でもあります。日本社会がグローバル化に対応するためには、意識の高いタイプ③の層を伸ばすだけでなく、タイプ①の学生たちの底上げが、いわば本丸ではないでしょうか。留学等の海外体験は異文化間能力の向

上に効果が期待できますが、参加人数に限界があります。その意味でも、海外体験に頼らない方策も大学教育に求められるのです。

本ニュースレターVol.18で報告した通り、BEVIの17の尺度の各平均スコアをみると、本学の学生たちは世界標準と比較し恵まれた環境に生育しつつも、社会や世界に対して関心が薄い傾向があり、異文化間能力に関わる尺度が低いです。2022年秋にBEVIと同時に実施した学生プロフィールの学修・生活行動自己チェック結果を新型コロナウイルス感染症流行前の2019年秋の結果と比べると、「教員や学生と自ら進んで交わり見聞を拓ける意識」や「留学生との交流や海外留学など、多様な文化を知る行動」が大幅に減退し、学生たちの意識や行動が内向き、自分中心に変化しました。コロナ渦により、不意に学業が遠隔授業方式に移行しそれへの適応に追われ、学生同士の交流も制限される状況が続いたことが心理面にも影響したことが考えられます。

そうしたコロナ渦の影響はあるにせよ、本学のBEVIの結果は日本人の若者の全般的な傾向の表れでもあります。13歳から29歳を対象にした内閣府の国際比較調査（2018）³⁾では、異文化理解力・対応力に関して、「十分に」または「ある程度身に着けていると思う」との回答（5件法）は、欧米諸国が60%前後であるのに対し、日本人は29.4%に留まりました。社会問題の解決に関与したいかとの設問（5件法）においても、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計は欧米諸国が60%前後であるのに対し、日本人は42.3%でした。調査の実施は2018年であり、コロナ渦を経て現在の若者の意識はさらに消極的に変化していることでしょう。こうした現状をいかに打開するかが、グローバル人材育成のカギと言えます。

異文化間能力に影響を与える要因

BEVIでは形成変数（性別、親の学歴・収入、海外経験など）ごとに、その傾向を低・中・高の3グループに分けて、各尺度の平均スコアを確認できます。尺度17に関して低グループと高グループ間に顕著な差が出たのは、国際的経験への関心度、国際的経験の満足度、外国語の流暢さで、尺度17のスコアは高グループが高いです。異文化間能力を高める第一歩は、外国または異文化への興味や外国人との交流の実体験でしょう。加えて、英語力がないと外国人との交わりを心理的に敬遠しがちですので、この3つが尺度17と関連性があるのは頷けます。

さらに、政治への関心度、宗教へのコミット、親の収入レベルの3項目も11ポイントの差がつき、高グループのスコアが高くなりました。BEVIが提供する集計データからは、それらの因果関係までは分析できないのが残念ですが、政治への関心が高い学生は尺度17のスコアも高いこと、および前述の欧米人は異文化間能力と社会問題への関心が共に高いことから類推すると、社会への関与意識と異

文化間能力との間には何らかの関係性がありそうです。つまり、世の中の出来事を自分事として捉えることが、他者（異文化）への関心に繋がるのではないのでしょうか。

ここからは筆者の想像の域を出ませんが、宗教へのコミットが高い人は、他の宗教との対比から異文化を意識するのかもしれませんが。親の収入レベルについては、広島大学の西谷氏によると、欧米では尺度17では差がつかないそうです。国内にいても外国人や外国にルーツを持つ人との接触機会が多いことがその理由として考えられます。一方、国内に外国人が少ない日本人の場合、外国人との接触機会は、どうしても本人が海外に出たときになります。親の海外勤務に伴い海外生活を体験したり、学費や生活費を親が負担して留学したり短期ホームステイしたりできるのは、比較的裕福な家庭に育った人が多いでしょう。それが、親の収入レベルが高い人のほうが尺度17のスコアが高い要因かもしれません。

海外研修を伴わない方策も求められる

前述の筆者担当科目「グローバル化と日本人」は、日本国内における外国人との共生、海外駐在等で海外に暮らす際の異文化対応を考える内容です。移民の受け入れの是非を議論したり、ケーススタディで海外生活での外国人とのギャップを学んだりして、できる限り異文化を自分事として考える構成にしています。

同科目の開講時と終講時にBEVIを受検させ学修効果を測定（27名）したところ、尺度17は平均値で+18の大幅な向上が見られました。異文化間能力に関わる尺度15（社会や文化に関して進歩的/オープンな傾向）も+11、尺度16（地球環境問題/サステナビリティへの関心）も+5でした。図3は尺度17の開講時（T1）と終講時（T2）の分布です。終講時にはDecile 1～3がいなくなり、全体的に高いDecileに改善しています。海外での実体験を経なくても、科目の内容次第で一定の効果が期待できることの一例です。

そもそも異文化に関心を示さない学生、英語に自信がないと外国人との交流を敬遠したり、学業や就職活動との兼ね合いや留学費用等の問題で留学に至らない学生た

ちに社会への関心と異文化への眼を養う方策が求められています。

- 1) 広島大学名誉教授西谷元氏より提供のデータによる
- 2) 東矢光代, 當間千夏. (2019). 世界の捉え方にみる学習者の特性とクラス・ダイナミクス, 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム, 23-45.
- 3) 内閣府. (2018). 特集1日本の若者意識の現状：国際比較からみえてくるもの, 令和元年版子供・若者白書.
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/s0_1.html (2023 年 7 月 27 日 参照)

■BEVI活用のおすすめ

BEVIは、2021年に文部科学省・スーパーグローバル大学創成支援事業の「大学の国際化フォーラム」で普及促進プロジェクトとして採択され、2023年5月現在、国立大学を中心に53大学で採用されるに至りました。多くは留学等の海外研修プログラムの効果測定ツールとして、留学前と後と2回受検させ、スコアの違いから留学の成果を確認しています。

本学でも各部局で実施する海外研修プログラムや授業科目の効果測定ツールとしてBEVIを活用していただければと待しております。本学はすでに利用契約を結んでいますので、部局等で費用負担することなく利用できます。詳細は筆者までお問い合わせください。

■BEVI普及セミナーのビデオ公開

本年9月11日、BEVIを開発したCraig N. Shealy氏（Western Washington University教授）およびBEVI日本語版を開発した西谷元氏（広島大学名誉教授）を本学にお迎えして、BEVIへの理解を深めるセミナーを開催しました。参加者は53名（本学26名、他大関係者27名）でした。

セミナーの録画を下記URLより公開します。ぜひご覧ください（2024年3月末日まで公開予定）。

ビデオ 前半：[VIDEO \(ynu.ac.jp\)](https://youtu.be/VIDEO(ynu.ac.jp))

- 開会挨拶：横浜国立大学学長 梅原出氏
- 基調講演 1：BEVIとは何か：Craig N. Shealy氏
- 基調講演 2：BEVI普及状況とBEVIの使いかた：西谷元氏

ビデオ 後半：[VIDEO \(ynu.ac.jp\)](https://youtu.be/VIDEO(ynu.ac.jp))

- 基調講演に関する質疑応答
- 測定事例 1：外国人との対話の深まりが学生にもたらすもの：山形大学准教授 菅原靖氏
- 測定事例 2：BEVIの全学部・大学院への導入によりわかったこと：横浜国立大学 市村光之

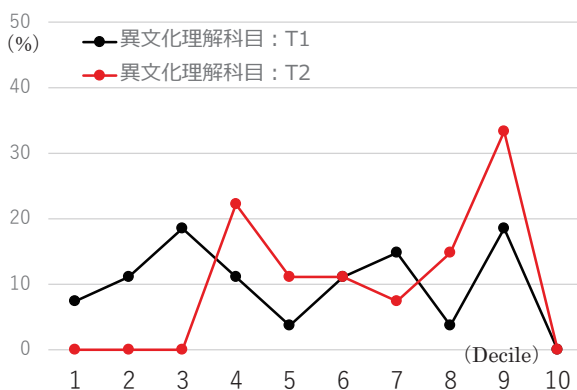


図3 尺度17 異文化科目開講時/終講時比較

CENTER NEWS

開催案内 2023年度 横浜4大学 第9回ヨコハマFDフォーラム

本学は、横浜市内にある3つの大学(神奈川大学、関東学院大学及び横浜国立大学)とFD活動の連携に関する包括協定を締結し、FDに関わる活動を進めています。その活動の一環として、毎年度「ヨコハマFDフォーラム」を開催していますが、今年度は以下の要領で開催することとなりました。

開催日時：令和5年12月9日(土) 13:30～16:45

開催場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス米田吉盛記念講堂(4階)

(Zoomによるオンライン配信を併用)

テーマ：大学教育の新たな展望：対面授業と遠隔授業の新たな教育モデルを検討する

開催趣旨：

コロナ禍の経験により、大学教育には遠隔授業の導入など多くの変革がもたらされました。一方で、2023年度は新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行するなど、社会的にコロナの影響が落ち着くなかで、多くの授業を対面での実施に戻す大学が増えていることから、改めて対面授業の重要性を再認識させられています。遠隔授業の経験により、対面授業においても積極的にICTを活用した授業が展開されるケースも増えていることから、本フォーラムでは、コロナ禍の経験を踏まえ、遠隔授業と対面授業の双方の観点からこれからの大学教育の在り方を検討します。

コロナ禍の3年間を通じて、多くの大学が大学教育における遠隔授業の利点や有効性を認識しましたが、アセスメントの困難さや生成系AIをはじめとする新たな技術への対応などが課題として挙げられました。さらに、これまで培ってきた遠隔授業の経験を対面授業にどのように取り入れ活用していくのかという点も、新たな課題として検討が求められています。

以上のことから、このポストコロナ時代は大学教育の新たな転換期といえます。遠隔授業と対面授業それぞれの利点と課題を整理し、遠隔と対面の組み合わせやそれぞれの授業でのアプローチなどの検討を通じて、新たな大学教育モデルの構築を目指すことが期待されます。

本フォーラムは、横浜市内の4大学からの事例発表を通じて、互いの実践的な取り組みや課題を共有し、それぞれの大学が教育改善に向けてFD活動に取り組めることを目指します。また、横浜市内4大学のみならず、大学教育及び高等教育の改革に関心を持つ教員や教育関係者などが集まり、知識の共有とアイデアの創出を図れるような貴重な機会としたいと思います。

本フォーラムの詳細は、チラシ等の案内資料が完成次第、各部署の事務方を通してご連絡いたします。今回は4年ぶりの対面による開催ということもあり、一人でも多く本学関係者(教職員・学生)にご参加いただきたく、皆さまお声がけの上、ぜひご参加ください。

— 高大センターからのお知らせ —

【2023年度秋学期授業アンケートの実施について】

第4ターム：2023年11月20日(月)～12月8日(金)

第5ターム/秋 semester：2024年1月18日(木)～2月14日(水)

※授業アンケート実施対象科目は、ゼミ、教育実習、卒業研究関連科目を除く、履修者10名以上の科目となります。対象科目であれば、授業支援システムの講義編集画面に自動的に登録されます。万が一、対象科目であるにも拘らず講義編集画面にアンケートフォームが表示されない場合は、高大接続・全学教育推進センターまでメールにてご連絡ください(aec-fd@ynu.ac.jp)。

【学生IR、FD活動の報告書類の公開】

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部署に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部署にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

■ 格納先:サイボーズ> ファイル管理 > 高大接続・全学教育推進センター

■ 提供文書の取り扱い：学内限定公開(本学教職員のみ)を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。

横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第20号 (通号46号)

発行：令和5年(2023)年11月 編集・制作：高大接続・全学教育推進センター

Email：aec-fd@ynu.ac.jp

ホームページ：www.yec.ynu.ac.jp